

ばんしょうざんだいがかいん  
萬祥山大岳院28世住職

# 中村見自さんの情熱

江戸時代に創建され、小説『南総里見八犬伝』のモデルといわれる人物たちの墓を境内にまつる禅院、萬祥山大岳院。

28世住職の中村見自さんは本業に加え、歴史の顕彰、まちづくり、カンボジア支援など、生来の行動力と情熱で走り続けてきた。大岳院の歴史と、中村さんの活動を紹介します。

## 里見忠義と八賢士が眠る 江戸時代開創の禅院

白壁土蔵群から静かなまちなみを東へ。左側に山門、楼門、奥には大きな屋根の本堂が目に入る。

ここは、萬祥山大岳院。江戸時代初頭から続く曹洞宗の古刹で、倉吉市を代表する名所のひとつだ。多くの観光客が目指すのは、倉吉で生涯を終えた安房里見家最後の当主・里見忠義と、その忠臣で曲亭馬琴の長編小説『南総里見八犬伝』のモデルといわれる「八賢士」の墓である。

慶長10（1605）年、倉吉城主の中村栄忠が、父・一栄のために建立。幼くして米子城主となった中村忠一の一族である。一栄の法名「萬祥寺殿大岳周碩大居

士」から寺院を「萬祥山大岳院」と名付け、伊豆の慶久寺住職である一栄の兄、孝山智順禪師を迎えて開創。中村家は、米子も倉吉もほどなくして絶えた。

里見忠義は文禄3（1594）年、安房館山藩の長男として生まれた。21歳の秋、老中・大久保忠隣に謀反を援助したとして所領のほとんどが没収。残った領地と引き替えに3万石分の生活費を補償されて倉吉に移ったが、諸経費等を引かれて手元に残ったのはわずかだったという。

神坂村（現東町・住吉町付近）に居を構えた忠義は、大岳院にしばしば通った。「若くして罪を被り、不満を抱えていたであろう忠義に、4世秀山可春和尚は禅の奥義を説いて聞かせました。

あるいは可春和尚も、絶家失脚した中村氏一族の者として同じ境遇の忠義と心が通い合ったのかもしれない。そう語るのは大岳院住職、中村見自さん。開創者と同じ姓なのは偶然で、祖父の代から大岳院を守る。

さらに扶持を減らされた忠義は、住まいを下田中、堀村（現関金町堀）に移し、29歳で世を去った。3カ月後、8人の忠臣が殉死。いずれも法名に「賢」の字が用いられ、やがて彼らは「八賢士」と呼ばれた。

忠義と八賢士の墓は大岳院の境内に祭られており、寺には鳥取県保護文化財「三彩模刻花文盤」など、忠義ゆかりの品が残されている。

## カンボジアの孤児たちを支援 地域、仏教界へ広がる交流

中村さんは平成元年、大岳院28世住職に就任。平成14年から、岡山・鳥取両県の曹洞宗寺院の代表である曹洞宗宗議会議員を務める。そして中村さんには、もう一つの顔がある。カンボジア支援・交流の草分け的存在なのだ。

遡ること25、6年。海外を旅するのが好きだった中村さんは、たまたま訪れることになったアンコールワットで、日本留学経験がある女性、チャン・スレイさ

んと偶然知り合う。帰国後、彼女から届いた手紙には「カンボジアの田舎の実態を見てほしい」と書かれていた。再度カンボジアへ飛んだ中村さんは、シエムリアップでボル・ポト政権の爪痕を目の当たりにする。「衝撃を受けました。投降した兵士の武器が安価で売買され、一般市民のポケットに手榴弾が入っている。道ばたでは地雷で足をなくした子どもたちがたくさん並んで寄付を求め、自分にも何かできないかと考えました」

中村さんは、チャンさんに出

資して旅行会社を設立。アンコールワットへのツアーを販売した。目的は、カンボジアの復興だ。「ツアー料金を5千円ほどを附加し、支援にあてていきます。5千円は当時、10人の家族が1カ月暮らせる金額。寄付金は、孤児の食糧や学資、井戸づくりなどに充てました。多くの子どもたちが教育を受け、孤児院を巣立っていきましました」

カンボジア交流は地域にも広がりが、「スバエクトーイ（カンボジア伝統の子ども影絵芝居）の会」という支援団体が倉吉で立ち

●昨年8月、曹洞宗の僧侶らとカンボジアの孤児院を訪ねた。中村さんらの支援により、多くの子どもが教育を受けて職を得た  
●大岳院境内の、里見忠義と八賢士の墓。置かれた大岳院の生母、大江盤代君の御祈願所に指定された



1



2

3



4



萬祥山大岳院28世住職・中村見自さん

上がった。「2000年、会が中心となってカンボジアの子どもたちを倉吉に招き、彼らの子ども影絵芝居や倉吉の小中学生でつくる『打吹童子ばやし』による太鼓演奏などを披露しました。2年後にはこちらが訪問し、世界遺産アンコールトム『象のテラス』前広場で演奏しました。普通ならありえないことです」

会では会長が他県へ移ったため活動が途絶えたが、中村さんは、孤児院を出た子どもたちの支援を個人的に継続する。中村さんを介して曹洞宗とカンボジアとの交流も深まった。「今後は曹洞宗の寺院を現地に建てられるよう、何かしたいと思っています」と、まだまだ思いは尽きない。

## 「途中の景色」を楽しみながら 本物志向のまちづくりを

中村さんは倉吉市行政改革懇話会会長、倉吉青年会議所理事長を歴任するなど、まちのために尽力。「壊して駐車場にしよう」と案が出ていた白壁土蔵群の保

存会を立ち上げ、東奔西走して土蔵の注目度を高めた。和太鼓第一人者の林英哲氏を招き、倉吉打吹太鼓の創設にも携わった。今は一線を退き、「古い者が口を挟んではいけない」とはにかみながらも、「これからの時代は、作られたまちづくりやまち並みではだめ。本物でない。歴史は本物なんです」と、本物志向のまちづくりを訴える。

「自分は高校生のころ、唐木順三の『途中の喪失』という本に影響を受けました。社会は今、スピードと最短距離ばかりを求めて、その途中の景色を見なくなつた。それが本当に人生の豊かさか、と。それで自分は、寄り道ばかりしているんです」と笑う。世界で全国で地域で、友情を育んできた中村さん。そのエネルギーは多くの人々に光を与えている。



◇萬祥山大岳院  
倉吉市東町 422 TEL: 0858-22-4541  
http://www.ncn-k.net/dai-gaku/

